



テレビやインターネットを流れるニュース。ただ眺めているだけで、ふとすることがある。『今日もまた世界のどこかで紛争が続いているらしい…。』宗教や主義や文化の違いから生まれてくる争い。それぞれの正義を振りかざして、そして人が死んでいく… そんなとき思い出すのが手塚治虫の「アドルフに告ぐ」だ。

作品は第二次世界大戦中の神戸とドイツを舞台に、アドルフという名の3人の人間がもつれ合う数奇な運命を描いている。一人はアドルフ・カミル。日本に住むユダヤ系ドイツ人の息子だ。一人はアドルフ・カウフマン。父親はドイツ総領事館員でナチス党員、母親は日本人。ユダヤ人のアドルフ・カミルとは親友だ。そしてもう一人はアドルフ・ヒットラー。ナチス党の総統だ。



# アドルフに告ぐ

文藝春秋社・講談社

手塚治虫



1936年、ベルリンオリンピックの特派員としてドイツへ向かった新聞記者、峠草平は、そこでベルリン大学留学中の弟が殺されたことを知る。殺された理由を調べた草平は、弟がある重大な秘密文書を日本へ送ったためであることを突き止める。その秘密文書は、ゲルマン民族の純血を賛美し、ユダヤ人を地上から抹殺せよと公言するヒットラーにユダヤ人の血が流れていることを示す出生証明書だった。その機密書類を巡って、様々な人物が絡み合い物語が展開していく。

この作品の最大のおもしろみは、世の中の出来事を「人間」というテーマから照らしているところだ。ユダヤ人を嫌いになりたくなかったアドルフ・カウフマンは、ドイツの血を賛美する中で、日本人の母、ユダヤ人の親友のことを悩む。

彼が血の葛藤に苦しみながら人格を形成していく様子がリアルで、読んでいて苦しくなるほどだ。一方、峠草平は日本中の人間が敗戦で大事なものを失ったにもかかわらず、それでも何かを期待して生きていく姿に感激する。

人格を形成する過程や人間性を描く中で、戦争とは、正義とは、そして、人間とは何か…。人として生きていくうえで大切なこととは何か。それを問いかけるのが「アドルフに告ぐ」であり、手塚治虫氏のテーマなのかもしれない。

(A-K)

## アドルフに告ぐ

1983年1月～1985年5月、文藝春秋社「週刊文春」に連載。作者が連載中に入院するなどのため、後半は大幅にカットされ、単行本化の時に加えられた。現在、文藝春秋社「文春文庫ビジュアル版」「文春コミックス」、講談社「手塚治虫漫画全集」より発売中。

# 十二国記



作：小野不由美  
講談社文庫

十二の国に十二の王。中国神話を思わせる架空の世界。これが「十二国記」の舞台である。この作品は、各巻ごとに主人公や時代が異なるのが特徴だ。共通の世界観をもとにして、様々な視点から物語は展開してゆく。そこで語られる人々の思いはとてもリアルであり、私たちが生きる現実の出来事に重ね合わせて考えてしまうものも多い。

例えば、王は国の安定や民の幸せを実現しようと政を行くが、それは必ずしもうまくはいかない。反逆者が出たり、臣との軋轢が生じたりする。また、王が国を正そうとするあまり厳法を定め、結果的に民を苦しめる様子や、安泰だったはずの王朝が、理由がわからないままバランスを失ってゆく姿が描かれている。このように、正しいと思うことをしたのに

望む結果が得られなかったり、目の前のものごとを客観的に見ることができずに判断を誤ったりすることは私たちの周りでもしばしば起こる。一国の統治というスケールの大きな問題であっても、その根本は身近な出来事にも通じていることに気付かされる。

国家や政治の話ばかりではない。周囲の大人に失望し、自ら王になるため過酷な旅を決意する少女の冒険や、自分に自信を持つことができず、周りからの期待にプレッシャーを感じてしまう少年が悩みながら成長していく姿なども描かれている。彼らが人と出会い、関わっていく中で、自分の愚かさに気付き新たな可能性を見出していく様にはとても親近感を覚える。この作品が単なるファンタジーで終わらない理由は、そこに描かれる人

※写真はシリーズ第一作「月の影 影の海」上巻。



間模様のリアルさにある。登場人物たちの感情は、喜び・悲しみ・怒り・苦悩だけにとどまらない。憎しみや嫉妬、傲慢など、人間が持つ暗い、醜い部分も手を緩めることなく表現されている。キャラクターたちが清濁を併せ持った生き物として、生き活きと描かれているのだ。

このように、決してきれいごとだけに終始しない内容が、この物語に迫力と現実感を与えている。そして、それがこの物語の最大の魅力だといえる。「十二国記」は、非常に幻想的な世界観を基盤にしていながら、妙にリアリティを伴う不思議な物語だ。この世界をぜひ一度体験してほしい。(ぱりぱり)

(法・1 綿菓子)  
(心当たりがある；編)

はみだし  
すてーじ

このペンネーム。僕のサークルの人だけは分かったりする。  
⇒こういう人、他にもいるはず。